「2050年代の社会を創造する コロンブスの卵を産む次世代の担い人へ」

環境省大臣官房民間活動支援室長 佐藤 隆史

いま、私たちは、「明治維新」そして「終戦」以来の大きなパラダイムシフト（それまでの普通が普通でなくなる、大きな考え方の転換）の時を迎えようとしています。こうした社会変革の過渡期の真っただ中で、私たちは何を感じ、何を選び、2050年の社会を創造するため、何に挑戦しなければならないのでしょうか？

環境省がまとめた冊子 "Eggs" では社会課題解決型ビジネスの事例が紹介されています。

日本は・・・

本格的な少子高齢化・人口減少、ユース層の都市部への流入超過による人口の偏在化など、成熟社会への大きなパラダイムシフトを迎え、人類がこれまで経験したことのない歴史を歩み始めています。それらは、AI や IoTのような課題解決につながる高度な技術イノベーションだけでなく、私たちの生活はもとより、人類の生存基盤である地球環境へも大きな影響を与えてしまう「社会課題」という形で私たちの目の前に立ちはだかろうとしています。

世界では・・・

「社会課題」の解決を起点としたビジネスモデルが大きなうねりとなっています。こうした世界の潮流の中、2015年に国連サミットにおいて採択された「SDGs（持続可能な開発目標）」は、"誰一人取り残さない"持続可能な社会を実現するために、環境・社会・経済の個々の課題を解決するのでなく、三つの側面における広範なそれぞれの課題の同時解決に向け、統合的に取り組むことを目指したものとなっており、世界各国における着実な実践が求められています。

社会課題は誰のものですか？ 誰が解決しなければならないのでしょうか？

2011年3月11日の東日本大震災の経験により、「震災復興」というキーワードと共に、社会課題を解決するのは行政だけでは困難であることに気づき、ビジネスによる持続的な社会課題解決への取り組みに対する社会的関心は一層の高まりをみせました。

こうしたビジネスの多くは新規性に富み、あるいは斬新でコロンブスの卵的な発想を伴い、日々その規模を大きく、多様化させ、社会に大きなインパクトを与え始めています。

「社会課題は誰のものなのか？誰が解決しなければならないのか？」日々、自分に問いかけてみて下さい。そして、コロンブスの卵のようにゼロから1を産み出す勇気と決断をもって、社会課題を解決する「次世代の担い人」として、ユースの皆さんも、実社会という海原へ漕ぎ出して下さい。

「全国ユース環境活動発表大会」に参加されている皆さんは、すでに社会課題の解決に取り組もうとする「次世代の担い人」たちの仲間と言えます。9月より環境省が主催する「第4回 全国ユース環境活動発表大会」の募集を開始します。日頃の活動を社会課題と結びつけ、誰にとっての課題なのか、なぜ自分がそれを解決しようとしているのか、しっかりと考えて発表して下さい。そして、地方大会、全国大会で全国の仲間たちと、ゼロから1への挑戦を楽しんで下さい。

徳島商業高等学校の
カンボジアでの"希望の工場建設プロジェクト"、
現地の学校経営継続を支援するために、
ゼロから1の発想で現地でのビジネス成功をめざす。

佐賀商業高等学校の
"SAGA藻わたしのみらい"プロジェクトは、
地元行政、地元企業との連携・協働により、
環境問題の解決と地元産業の活性化の同時解決をめざす。